

パリ通信・第163号

ジャコモ・セルポッタ

昨年夏シラクサで「聖ルチアの埋葬」を見て、メッシーナで「羊飼いの礼拝」、ナポリは「七つの慈悲」、ローマ「聖マタイの召命」「聖マタイの殉教」、マルタ島「洗礼者ヨハネの斬首」と一年をかけてカラヴァッジョの足跡を追ってきた。特にシチリア島の自然と文化には深く感動し、カラヴァッジョが最後に訪れたパレルモに来た。

パレルモは人口68万(周辺部を入れると120万)、ローマ、ミラノ、ナポリ、トリノに次ぐイタリア第五の都市である。フェニキア人、ギリシャ人、ローマ人、アラブ人、ノルマン人と異なる勢力に支配され発展してきたパレルモだけに建築、料理、言語と文化の多様性に深く結び付いてきた。少し街を歩いただけで、ローマ様式、ノルマン様式、イスラム様式、ゴシック様式、ルネサンス様式、バロック様式、新古典様式が共存してきた特有の文化であることに気付く。

シチリア・バロックの代表的な建築「サン・ロレンツォ・オラトリオ(祈祷所)」にパレルモ唯一のカラヴァッジョ「聖ロレンツォと聖フランチェスコがいるキリストの生誕」(1609年)(298x197cm)(シチリア島最後の作品)がある(正しくは「ある」ではなく「あった」)。カラヴァッジョは1608年マルタ島の牢獄を脱出してシチリア島に逃れ1609年晩夏までシチリア島で制作していた。シチリア島滞在中に聖フランチェスコ修道会の注文で描いたのが「聖ロレンツォと聖フランチェスコがいるキリストの生誕」だ。

1951年ローマで修復が行われ、パレルモの「サン・ロレンツォ祈祷所」に戻って来たが、1969年10月17日夜盗難に遭った。2x3mの大きな作品である。祭壇上に額に入って高く掲げてあったのを額に沿って切り取り持って逃げたと言う嘘のような話だ。シチリアマフィアの計画的犯行とみられ、FBI始め世界中に捜査網が張られているそうであるが闇市場で売却されたのか、以後取り戻すことはできず、今後もう出てくることはないだろうと悲観的な見方である。

現在は1967年(盗難の2年前)撮影されたオリジナル作品の写真を元にコピーが飾られている(写真右)カラヴァッジョ盗難はとて残念なことだが、世界中の注目を浴びる結果となり、寂れていた「聖ロレンツォ祈祷所」を修復する機会となった。シチリア・バロック、特に1600年から1700年に頂点を迎えるパレルモ・バロック様式を復活させる機運に繋がったのである。



その「パレルモ・バロック様式」に欠かせないのがジャコモ・セルポッタ(1652-1732)だ。パレルモに生まれ、パレルモの多くの教会、祈祷所の内装をした「スタッコ彫刻家」である。彫刻家の家に生まれ、早くに父親を失うが、息子と共にパレルモを中心に活動している。ローマでベルニーニの彫刻を見ていたと思われるが、セルポッタは大理石ではなく「スタッコ」を選んだ。「スタッコ」とは石灰に大理石粉や砂、骨材、セメントなどを水に混ぜて柔らかい状態で形を作り、渾くと硬くなる建築材料だ。セルポッタは彫刻を始め、浮き彫り、だまし絵、壁枠など幅広い装飾に利用し、大理石の高貴さに負けない「セルポッタの白」を生み出したのである。

1600年からパレルモでは「オラトリオ建設」が盛んに行われた。長方形で正面に祭壇を置いた単純な建築であるが、「聖ロレンツォ祈祷所」「聖ロザリオ祈祷所」「聖ドメニコ祈祷所」「聖メルクリオ祈祷所」「ヴィアンキ祈祷所」など、至る所に建立され、セルポッタがその内部装飾を引き受けたのだった。宗教上の制約は尊重しつつもセルポッタの自由で人間味に溢れる感性と細部の完成度は唯一無二で、「プットー」と呼ばれる羽根の生えた小さな天使(裸の男の子)の表情は愛らしく、4面の壁一杯を飾った彫刻、レリーフ彫刻は白く明るく輝き、「美徳、自由、勝利、謙遜」と言った



アレゴリー人物たちは官能的で、セルポッタの深い観察力、感受性、人間性、それを表現するスタッコ技術の素晴らしさにその場を離れ難い感動に包まれた。パレルモのカラヴァッジョを見ることはもうできないだろうが、それを補って余りあるパレルモの素晴らしさで、次回いつシチリア島に来れるか分からないが達成感ある滞在だった。(古賀順子記)